

評価	長期経営目標	短期経営目標	主な取り組み内容	評価指標	達成状況		学校関係者の評価	評価
					A満足できる	Bおおむね満足できる		
知	すべての生徒の進路を導くために、生徒が主体的に取り組む授業づくりの取組を組織的に推進している	(1) 生徒の授業評価アンケート「『やってみたい』と感じる課題やめあてでしたか」強肯定群70%以上、教師の授業評価アンケート「生徒が主体的に取り組めるような課題が設定できている」強肯定群70%以上 (2) 生徒の授業評価アンケート「仲間の考えや意見を基に自分の意見をより良いものへと変えることができましたか」強肯定群70%以上、「根拠をもとに自分の考えを説明したり、書いたりする時間はありましたか」強肯定群70%以上 (3) 生徒の授業評価アンケート「授業の振り返りの時間はありましたか」肯定群70%以上 (4) 自主学習ノートの提出率80%以上	(1) 生徒の学力にあった課題やめあてを設定し、主体的に取り組むことができるようにする。また、生徒の「やりたい」「できる」の思いを大切に取組の充実を図るために、授業の見直しを示す (2) 生徒と教師との対話や既習事項などを用いながら、自分で思考・判断したものを書いたり、相手に説明したりするなど、表現する場の設定をする。また、生徒の考えをクラス全体でブラッシュアップしていく (3) 授業の終了に振り返りの場を設定し、生徒自身が1時間の授業を通してどんな力が付いたか、何ができたようになったか、教科の特性を取り入れながら考えさせる (4) 毎日の家庭学習での課題として自主学習ノートに取り組み、家で勉強する習慣をつける。生徒会学習部と連携して家庭学習に備え付けを行ったり、リレー自学をしたりして友達との自学を見合う場をつくる。	(1) (2) (3) 生徒と教師双方の授業評価アンケートを学期に1度(6月、11月、2月)行い、目標(到達指標)を達成している。 (4) 自主学習ノートの提出率・生徒会の取組	(1) ①生徒の授業評価アンケート「『やってみたい』と感じる課題やめあてでしたか」強肯定群52.5% ②教師の授業評価アンケート「生徒が主体的に取り組めるような課題が設定できている」強肯定群22.2% (2) ①生徒の授業評価アンケート「仲間の考えや意見を基に自分の意見をより良いものへと変えることができましたか」強肯定群57.7% (3) ①生徒の授業評価アンケート「授業の振り返りの時間はありましたか」肯定群93.8% (4) 自主学習ノートの提出率84%	中学校の授業形態が小学校の授業形態と近く、子どもが授業に入り込みやすい。「自らの学びを実感できる」ことは、今後の生活においても必要で、さらに積極的な生徒を育ててほしい。また、引き続き、生徒が「やってみたい」「学習することがおもしろい」等と感じられるような授業づくりに取り組んでいってほしい。	B	B
徳	「幸福・愛・信じあう心」が通う授業が創造されている	(1) 道徳意識調査「自分には良いところがある」肯定群90%以上。Q-Uアンケート「学校生活不満足群」の生徒10%以下。 (2) 生徒(保護者)の学校評価アンケート「あいさつができています」強肯定群80%以上。 (3) 読書アンケート「読書が好き」肯定群90%以上。	(1) 全教育活動の中でボイスシャワーを実施する。また生徒の長所を取り組んだことに対して、生徒間で相互評価できる場を設定し、自尊感情を高める。 (2) ルールやマナーをしっかり守っている生徒や元気なあいさつをする生徒の姿を評価し、前向きに取り組もうとする意欲を育てる。 (3) ①図書館の環境整備をし、快適な読書空間を作るとともに生徒会図書部が読書活動の推進を図る。「読みたい本」を収集することで読書への関心を高める。	(1) 道徳意識調査「自分には良いところがある」肯定群90%以上。Q-Uアンケート「学校生活不満足群」の生徒10%以下。 (2) 生徒(保護者)の学校評価アンケート「あいさつができています」強肯定群80%以上。 (3) 読書アンケート「読書が好き」の肯定群が90%以上。	(1) ①道徳意識調査「自分には良いところがある」肯定群79.3% ②Q-Uアンケート「学校生活不満足群」の生徒21.5%。 (2) 生徒(保護者)の学校評価アンケート「あいさつができています」強肯定群生徒54.1%(保護者37.1%) (3) 読書アンケート「読書が好き」の肯定群が80.8%。 (1) ①について、自己肯定感1自己調査と比較して2学期調査では16.2P上昇し、ボイスシャワーや肯定的評価の力を入れて取り組んできた成果が見られる一方で、Q-Uアンケートでは目標を達成できなかった。1学期調査と比較して2学期調査では8.8P減少しており、取り組みの方向性は間違っていないかと考える。 (2) については、指標の目標値が高く達成できなかったが、肯定群全体を見ると生徒93.4%(保護者85.5%)で、特に生徒は昨年度より肯定的回答が9P上昇した。引き続き指導を継続していきたい。 (3) については、読書の読書活動を継続したり生徒会図書部からおすすめの本を紹介する活動等を行った。目標値を10P近く下回っており、図書室の環境整備を含め、さらなる取り組みが必要である。	自己肯定感のポイントが上昇しているのは大きな成果だと見える。日ごろの先生方の声掛けや評価の仕方から、生徒が「自分にはよいところがある」と実感できているのではないかと、ボイスシャワーや声のかけ方でやる気満々、気分も明るくなる。図書室の環境で人が足らないのであれば、ボランティアを募ればどうか。挨拶は、返ってくる生徒、恥ずかしいの行き過ぎる生徒、それぞらしい。	B	B
体	たくましく生き抜くための体力や健康的な生活習慣が身に付いている	(1) 保健体育の授業や部活動に意欲的に取り組み、全国体力・運動能力調査のT得点において、男女ともに全国平均以上である (2) 生活点検により、朝食における三色食品群の摂取率45%以上、23時まで就寝50%以上。 (3) 肥満度20%以上の生徒の割合が20%以下。	(1) 保健体育の授業の中で各学年の発達段階と共にD-E群の生徒も楽しさを感じられる多様な運動との関わりのある体育授業を展開し、生徒の関心意欲の向上を図る。「こどもの子ども体力・運動能力向上プログラム」を活用すると共に、個々の課題を把握し、体力向上につながる取組を工夫し実施する。保健だよりや学校だよりを通して、体力向上(体づくり)の一環として家庭での生活スタイルの意識向上に努める。 (2) (3) 学期に1回生活点検を実施し、現状や改善状況を把握する。生徒会保健部の活用や栄養教諭・村の食育推進委員会と連携した啓発活動を行う。課題のある生徒には個別保健指導を実施する。教職員PTA役員に提案し、保護者との協働を検討する。年2回の身体測定の実施。生徒・保護者に対する医療機関受診勧告、保健指導の推進、家庭での生活状況の聞き取り等を行う。	(1) 保健体育の授業において、授業の流れやめあての提示、評価の基準の設定等、スタンダードに基づく授業が行われ、多様な運動との関わりのある授業となっている。 (2) (3) 生活点検を学期に1回実施し、保健だよりで啓発している。PTA役員会の課題にパラソルのよい朝食の摂取に関する取組を提案している。年2回の身体測定において肥満度を調べ、個別に指導・支援を行っている。	(1) 体力テストの結果は、県平均と比べると劣る部分もあるが、全体的に昨年度の個人の記録よりは数値が高くなっており、2年生の男子の一部はレベルが高い。女子は県平均によってばらつきはあるが、全体的に上がってきているので、年間を通して苦手な種目での取り組み方法の工夫が必要になっている。しかし、男子なかでも一部個人記録の数値が低いものがあり、全体的みると、全国平均・県平均以上とならな生徒もいる。 (2) ①生活点検により、朝食における三色食品群の摂取率54.7% ②23時まで就寝51.3%。 (3) 肥満度20%以上の生徒の割合16.9%。 運動に楽しみ、楽しむ生徒が多い一方、個人個人の能力差は大きく、苦手な生徒は日々苦悶したがらない傾向がある。健康的な生活習慣については、家庭の協力もあり目標を達成できている。学期前を過ぎても、体力向上や健康意識のための生活習慣の確立に向けて、自発的な生活を促れるよう、保健体育や家庭科の授業、保健指導等を通じた指導を継続していきたい。	体育大会は、生徒が生き生きと体を動かしているのを見た。1日開催にすべきではないか。	A	A
不登校・特別支援	生徒全員が安心して登校している	(1) 不登校(長期欠席)への総合的な対応 ①学校生活7か「みんなで何かするが楽しい」肯定群90%以上。 ②新規の不登校生徒を出さない。 ③道徳アンケート「いじめはどんな理由があってもいけないこと」肯定群100%	(1) ①生徒が主体となり企画立案から実施まで行う行事をクリアする。 ②二者面談や支援会、関係機関との連携の充実。 ③いじめや身近にある問題を生徒が主体的に話し合い解決する場の設定する。	(1) ①1・2学期を中心に学校行事等活性化させ、到達指標をクリアする。 ②面談を学期に1回実施し、不登校の未然防止に努めている。また校内支援委員会を計画的に実施する。 ③いじめ防止基本方針の年2回以上の研修と特別活動等において課題解決の場の設定を年3回以上実施する。	(1) 不登校(長期欠席)への総合的な対応 ①学校生活7か「みんなで何かするが楽しい」肯定群92.2%。 ②2学期末現在、新規不登校生徒0人。 ③道徳アンケート「いじめはどんな理由があってもいけないこと」肯定群93.1% ①については、強肯定51.6%、肯定40.6%で強肯定群のほうがより多く、生徒主体の活動の実現が成功体験につながり、一定の成果を上げている。②については、長期欠席者全体では9名在籍おり、引き続き丁寧な対応が必要である。③については、指標は達成できていないが、1学期(87.5%)よりも改善が見られ、100%を達成した学年もあった。引き続き人権意識を高め、多様性を認め合える集団を育成することで安心して登校できる学校づくりに向け取り組みを行ってきたい。	生徒主体の活動の充実が成功体験につながるとともに、仲間づくり、居場所づくりにつながっていると考えられる。一方で、不登校の生徒が多いという話もよく聞く。「みんなで何かをするには楽しい」は、人とかかわって生きていくために味わってほしい、感じてもらいたい感情なので、今後も取り組みを続けてもらいたい。	B	B
横断	(1) ICTを日常的に活用する授業実践・教育活動の充実 (2) 防災を中心とした安全教育・安全管理が充実している	(1) ICTの活用・情報リテラシー等の教職員研修や学習の機会を持ち、授業や家庭学習等での活用方法や実践力の向上と共にルールやマナーの育成を行う。 (2) ①計画的に避難訓練及び防災学習を行い、災害に備えている。②生徒の防災意識が高まっている。③校内の安全点検が組織的に行われている。	(1) ①ICTの活用及び情報リテラシー育成に向けた学習を持ち、授業や家庭学習等での活用方法や実践力の向上と共にルールやマナーの育成を推進していく。 (2) ①②様々な状況を想定した避難訓練を行い、「高知果実安全教育プログラム」などを利用して防災学習を行う。③担当箇所を定め、教職員全員で校内の安全点検を行いながら、専門委員会の活動にも反映させる。	(1) ①主体的、対話的で深い学びを実現するために、ICTを効果的・積極的に活用する。外部講師を招聘しICT活用及びネットトラブル等も含めた教職員・生徒の研修を実施する。②学びタイムなどでミライシードを活用する。タブレット端末の有効な活用方法や実践例を参考に研修を行う。 (2) ①年間、防災学習を5回以上、避難訓練を3回以上実施 ②学校評価アンケート「地震が起こったときのように行動したらいかがか」肯定群100%。 ③校内安全点検を学期に1回実施(教職員及び専門員会生徒)	(1) ①授業はもちろん、生徒会活動等でもICTを積極活用しているネットトラブルも含め年度当初全校生徒に対して警察からの講話を実施した。②学びタイムなどでミライシードを活用した。教員同士、タブレット端末の有効な活用方法を学び合う雰囲気も醸成されている。 (2) ①年間、防災学習を5回以上、避難訓練を3回実施 ②学校評価アンケート「地震が起こったときのように行動したらいかがか」肯定群93.5%。 ③校内安全点検を学期に1回実施した。 (1) ①について、ICTを活用しない日はなく、タイピングを含め生徒の活用技術は高い。デジタルとアナログの効果的な使い分けについて研究していきたい。 (2) について、生徒の防災意識は昨年度より高まっており、引き続き安全教育を推進していきたい。	これからの時代を生き抜く中学生にスキルアップしてほしい。	A	A
小中連携	小中学校で9年間を見通した児童生徒の育成を行い、郷土愛を育む取組を推進する。	(1) 茨西村の目指す子ども像に基づいて小中学校間で協働した取組が進められている。	(1) ①探究的な学び推進事業を軸に小中間で教員の連携・交流を活性化させる。 ②合同研修や授業研究等の機会を通じて、児童生徒の課題等を共有し、小中で連携して課題解決に向けて実践を進める。 ③「総合的な学習の時間」を中心に、地域を題材にした学習を進め、生徒自身が地域や社会のため何ができるか考え行動する場面を設定する。	(1) ①②各学年と担当者の打ち合わせを定期的に行う。指定事業に係わる連絡会を毎月小中合同研修を年3回以上行う。また、公開授業等にできる限り参加し合う。 ③道徳アンケート「地域や社会をよくするために何をすべきか」を考えることがある。」の肯定群90%	(1) ①授業はもちろん、生徒会活動等でもICTを積極活用しているネットトラブルも含め年度当初全校生徒に対して警察からの講話を実施した。②学びタイムなどでミライシードを活用した。教員同士、タブレット端末の有効な活用方法を学び合う雰囲気も醸成されている。 (2) ①年間、防災学習を5回以上、避難訓練を3回実施 ②学校評価アンケート「地震が起こったときのように行動したらいかがか」肯定群93.5%。 ③校内安全点検を学期に1回実施した。 (1) ①について、ICTを活用しない日はなく、タイピングを含め生徒の活用技術は高い。デジタルとアナログの効果的な使い分けについて研究していきたい。 (2) について、生徒の防災意識は昨年度より高まっており、引き続き安全教育を推進していきたい。	授業を通して地域のこと、社会のことを今一度振り返って捉え、自分事としてできることを考えるきっかけができたと思う。小中の教員同士が打ち合わせをすることで、様々な取り組みの方向性がわかりやすいと思う。	B	A